



MOOC の拡大は何をもたらすのか

■ 白井 克彦

昔から、ICT の教育への利用については、多くの試みがなされてきた。近年でも、米国で大いに盛り上がり世界に拡大している、MOOC があるし、日本では初等中等教育における ICT の本格的な利用ということがある。

MOOC は、米国を中心に有名大学の教授の授業をネット上で無料で配信するもので、試験に合格すれば、終了証がもらえる。ヨーロッパでも多くの授業が公開されているが、これは、高等教育のコンテンツを途上国を含む世界中で自由に利用できるようにする OER (Open Educational Resource) という考えに立脚する。もちろん、コンテンツ提供者の宣伝であったり、文化や思想の発信の意味も持つ。

MOOC が発展すれば、大学教授は減ると話した関係者もいるが、実際は、そんなものではなく、世界中にはたくさんの講義が必要である。つまり、多様こそ本質と思う方が当たっているようだ。

他方、ICT による教育方法の改革については、授業時間外で講義を受けて予習しておき、教室ではいわゆるアクティブ・ラーニングを行う、「混合授業」や「反転授業」が、多く行われるようになってきた。また、初等教育では、1人1端末で、教員と生徒たち、さらには、生徒同士の情報交換、豊富なコンテンツの利用などが簡単にできるようになっている。このような教師、学生および学生同士のさまざまな情報交換とそこにコンピュータも参加する学習は、確かに効果的であるかもしれないが、他方、かなり騒々しく、学生の集中した深い思考や創造的活動を

■ 白井 克彦
放送大学学園理事長・早稲田大学
学事顧問

1968年早稲田大学大学院理工学
研究科博士課程単位取得満期退学。
工学博士。2002年早稲田大学第
15代総長に就任。2010年11月退
任と同時に同学事顧問。2011年4
月より放送大学学園理事長。専門
は知能情報学。



妨げるおそれもある。したがって、新しい手段が本当に教育に役立つかについては、簡単に評価はできないが、学生たちの関心度を高めて、可能性を引き出すようなことには有効なはずである。

MOOCの大きなうねりによって、大規模な学習過程のデータが蓄積されつつある。ビッグデータの解析は研究的な段階であるが、マクロにはカリキュラムの効果的な作り方を明らかにするなどの応用が考えられる。また、学生個人のミクロな学習指導においては学習状況に応じた指導を可能にする。MOOCあるいは、各大学における学習データを標準化してすべてを合わせて学習eポートフォリオとして個人が管理できるものとするれば、個人の終生の学習過程の軌跡が可視化されて、学生自身の学習指針として有効であるし、大学等の入学や就職時の参考データとして有用なものとなるであろう。

MOOCが世界中で拡大していくと、その教材全体の莫大な知の体系は、やがて全人類が自由に学べるクラウド型大学を形成するだろう。そしてその知識のデータベースは、人間の学習過程という重要な付属データとともに分析の対象となりそうである。しかも、それは、電子書籍をはじめとする知的、文化的データベースと関係づけることが可能である。際限なく増大するデータに知的な分析軸を適切に形成することは、きわめて重要で挑戦的課題である。人類の知の形成と発展、それと社会の関係などビッグデータはこれから大いに語ってくれるだろう。

